【主題】米作りを通して「食」についての関心と自己有用感を高める学習の実践記録

【副題】総合的な学習の時間「つながろう！米と田んぼとわたしたち！」の実践を通して

【学校・団体名】宮城県柴田郡柴田町立槻木小学校
【役職名・氏名】教諭　菅波　康二

1　はじめに

総合的な学習の時間に米作り体験を通して様々なことを学ぶ実践が見られる。学習田を活用したり，バケツで稲を育てたりと方法は様々だが，多くの学校で実践しているのをよく目にする。本校も４０年以上前から，地域の農家の方や保護者の方々にご協力いただきながら，学校近くの学習田で毎年欠かさず米作り体験を行ってきた。子供たちが普段経験することのほとんどない田植えや稲刈りを体験することは，それ自体が大変貴重であり，子供たちにとってすばらしい思い出になることであろう。

本実践は，令和３年度に５学年の総合的な学習の時間に行った実践である。米作りを通して，５年生の子供たちが自分たちのこれまでの生活を振り返り，課題を見つけ，自分たちにできることを考え，実行し，自己有用感を高めていった学習の流れについて述べていく。

2　主題設定の理由

（1）なぜ「食」についての関心を高めたいのか？

担任した学級は，給食の残食が大変多かった。子供たち一人一人の食べられる量や欠席状況にも左右されることなので，残食が多いことが一概に悪いこととは言えないと思うが，時折子供たちが食べ物を粗末に扱う姿が見られた。食べ物が豊かにあり，食べることにあまり困ることがない現代を生きている子供たちに「食」に目を向けさせ，「食」について学習させたいと考えていた。毎年５年生が行っている米作りに関連付けることは，「食」について深く学習する機会として適していると考えた。

（2）なぜ自己有用感を高めたいのか？

学級の中には，生徒指導的な問題を抱えた児童も数名おり，自分が誰かの役に立ったという経験に乏しい児童もいた。自分たちの活動が学校内だけにとどまらず，社会とつながり，学校外の「世のため人のため」になる経験をすることで，自己有用感を高めさせたいと考えていた。

3　児童の思考の流れを意識した実践

（1）体験する①

５月１３日，子供たちは晴天の下，田植え体験を行うことができた。事前に依頼をしていた農家の方に苗の扱い方や植え方を教えていただいた。学年委員中心に保護者の方々にもお手伝いいただき，実施することができた。

ほとんどの児童が田植えは初めての経験であり，楽しみながら活動することができた。

【子供たちの感想から】（抜粋）
・田植えをする人は，昔（今も）とても手間ひまかけて作っているということがわかりました。
・食べるのは簡単なのに，作るのは大変だなと思いました。
・田んぼには意外と生き物がたくさんいました。

（2）課題を見つける（課題に出会わせる）

ある日の給食の時間・・

C:先生、今日もたくさん残っちゃいましたね・・。

T:そうだね。みんなは１回の給食でどれくらいのお米を残しているんだろうね。

C:明日の給食のとき，残したお米の重さを量ってみたらわかるんじゃないですか？

というやりとりが生まれた。学級全員に知らせると，調べてみたい児童が多数おり，調べてみることにした。

翌日の残ったお米はビニル袋に入れ，はかりで計測すると 1.4g であった。

１回の給食でこれだけ残るとする

と，１週間で・・・。１ヶ月で・・・。１年間では・・。と子供たちは計算をはじめた。そのようなやりとりの中で，学級でこれだけの量が残ると言うことは，学校全体では？柴田町では？宮城県では？日本全国では？と児童に最初の課題が生まれた。

（３）課題について調べる①

子供たちはインターネット検索を使い，日本では一体どれくらいの食べ物が廃棄されているのか，という課題について調べはじめた。

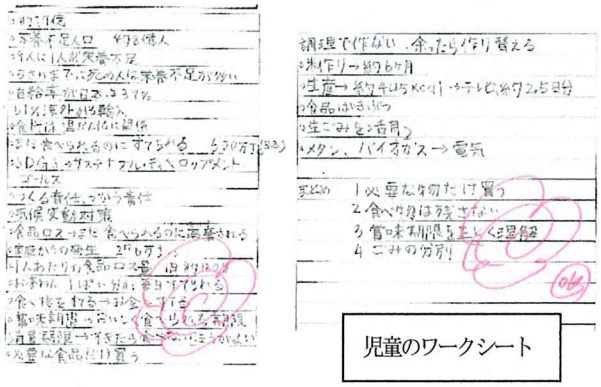
C:先生，日本では１年間で600万トン以上の食糧が捨てられています！

C:一人に換算すると，１日に茶碗１杯分捨てている！

C:世界では年間１３億トン捨てられていますよ！

と食糧（フードロス）問題に出会うことができた。

フードロスについてさらに深く学習させたいと考え，宮城県環境生活部環境政策課が行っている環境教育出前講座を活用した。ゲストティーチャーを招いて世界の食糧問題についてのお話を伺うことができた。



児童のワークシート

（４）課題について調べる②

日本や世界の食糧問題について深く知った子供たちは，さらに調べ学習を進めた。

その過程で子供たちの中に，「食糧をできるだけ廃棄しない活動」が世に中にあるという情報に出会うことができた。それが，「フードバンク」である。

T:○○さんが，「フードバンク」というものを見つけたんだけど，だれか知ってる？一体どんな活動だろうね？

C:え？初めて聞きました。調べたいです。

C:フードバンクって，まだ食べられるのに処分される食べ物を困っている人に届ける活動みたいです！

T:困っている人ってだれ？

C:福祉施設とか，子ども食堂って書いてあります。ん？子ども食堂って何だろう？調べてみます。

このようなやりとりを通して，子供たちは「子ども食堂」の存在にも出会うことができた。

そして・・・

C:先生，柴田町にも子ども食堂があるみたいです！

と柴田町内の子ども食堂に出会った。

（５）体験する②

１０月４日，子供たちが楽しみにしていた稲刈りを行った。ほとんどの子供たちが初めての経験であった。農家の方の説明をしっかりと聞き，一心不乱に刈り取り作業を行っていた。収穫したお米は，農家の方に脱穀し玄米にしていただき，学校に届けられた。また，学年委員さんが手分けをして町内のコイン精米所で白米に精米してくださった。

本校では毎年，学年 PTA 行事を行っている。学年ごとに親子で様々なイベントを楽しむ行事である。例年，５年生は収穫したお米を使って，おにぎりや豚汁などを作り，収穫祭を行っていたが，新型コロナウイルス感染症の影響で，飲食は避けている。そこで，学年委員さん中心に話し合った結果，収穫したお米を，子供たちがデザインした米袋に，親子で袋詰めすることとなった。

みんな和気藹々とした雰囲気の中で楽しく活動することができた。後日子供たちに感想を聞くと，「自分たちが育てたお米はひと味違った。」「いつもよりおいしかった。」という感想が多く聞かれた。

この学年 PTA 行事の際，学年委員さんに１つお願いをしていた。それは，「お米を余らせる」ということである。収穫したお米を全て子供たちに配付せず，意図的に一定量余るように分配量を計算していただいた。

（６）自分たちにできることを考える

T:先日の学年 PTA 行事でみんなが育てたお米を持ち

帰ったけれど，実はまだまだ余っているんです。このお米，どうしようか？今日は，この余ったお米をどうするか考えよう。

子供たちからは，販売する，もっと持ち帰る，下級生にあげるなど様々な考えが出されたが，話し合いの中で，フードバンクに寄付するという案が出された。様々な案の中から，子供たちの希望を聞いたところ，最終的には満場一致で寄付することに決まった。

自分たちが育て，収穫したお米が，誰かの役に立つとい７うことに子供たちはうれしそうな表情であった。

寄付することに決まってから，どのような手順が必要なのか，子供たちは手分けして調べた。

C:送料がかかってしまうのか・・・。

C:先生,寄付するさきがたくさんあります！

C:この前見つけた柴田の子ども食堂はどうですか？

C:学校まで受け取りに来てくれるところはないかな。

C:困っている子どもに食べてほしいな。子どもに届けるためにはどこに寄付すればいいんだろう。

など，自分たちのお米の寄付先を調べ，以下の３団体に決定した。

①NPO 法人アスイク（岩沼市）
②イオン富沢店（仙台市フードドライブ）
③さくら食堂（柴田町内の子ども食堂）

①NPO 法人アスイク（岩沼市）

家庭で余っている食品や余剰在庫などで廃棄される食品，農家で余っているお米などを受け付け，必要としている各家庭へ提供している。夏休みなど給食がなくなる期間に生活が苦しくなっている家庭、緊急で支援が必要となった家庭、食料支援からつながることで関係が作りやすい家庭などに提供。食品にとどまらず、不要になった家電や制服なども届けている。（HP より）

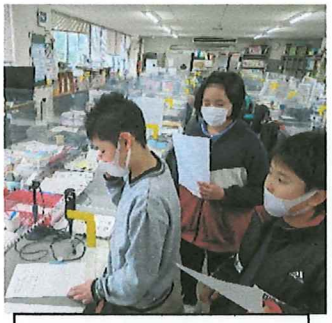
②イオン富沢店（仙台フードドライブ）

仙台市では、まだ食べることができるにもかかわらず捨てられてしまう食品ロスを削減するため、事業者と協力し、自宅等で余っている食品を持ち寄りフードバンク団体へ寄付する「フードドライブ」を実施している。県内各地のスーパーマーケットや様々な施設で随時，または期間限定で受け付けている。（HP より）

③さくら食堂（柴田町内の子ども食堂）

「子ども食堂」とは，「子どもが一人でも食事ができる」，「無料もしくは低額で参加できる」「継続的に開催している」活動の総称である。

子ども食堂は「多様性」のある活動で，子どもだけでなく地域の高齢者や一人暮らしの若者など誰でも参加できる子ども食堂もある。食育をテーマにしている活動もあれば、宿題など勉強を教えてくれる活動もある。（HP より）


各団体へ電話で依頼する様子

それぞれの団体・施設に連絡することも子供たちに任せた。電話係を募ったところ，希望者が多数おり，抽選で決めた。電話原稿をみんなで作成し，各団体への寄付を申し出た。

３団体とも快く受け入れてくださった。

NPO 法人アスイクの方への受け渡し

NPO 法人アスイクとさくら食堂は，学校まで引き取りに来ていただくことができ，それぞれ代表の方へ子供たちが直接受け渡すことができた。子供たちは，直接感謝の言葉を掛けられ，とても達成感を感じている様子であった。また，さくら食堂の方からは後日お礼のお手紙もいただき，自分たちの活動が「世のため人のため」になったことを改めて実感することができた。

さくら食堂の方への受け渡し

イオン富沢店の方への受け渡し

イオン富沢店は，店舗での受付のみ可能ということで，担任が直接店舗へ届けた。店舗の方から子供たちへお礼の言葉を伝えられたことを子供たちに話すと，またうれしそうな表情を見せてくれた。

（7）まとめる・表現する

１１月，これまでの自分たちの活動をまとめ，発信する活動に入った。まとめ方・発信の仕方については，壁新聞に掲示することとミニ新聞を配付すること，学習用タブレットの文書作成ソフトを使ってのレポート形式などを提示した。新型コロナウイルス感染症の状況を鑑みて，他学年や保護者を集めて発表会をする形式は避けた。

児童が壁新聞形式でまとめた成果物

子供たちの成果物は，廊下掲示をしたり，お互いに読み合ったりして，学びの交流・発信とした。

4　まとめ

本実践は，田植え体験という活動を入り口に，フードロス問題に目を向けさせ，フードバンクや子ども食堂の活動に子供たちを参加させるような流れを意識しながら進めた。そして，子供たちが自己肯定感を高めるためにはどのような活動が適しているのかを考えた。

外部の協力を「いただく」だけでなく，自分たちの活動が誰かの役に立ったり，社会貢献につながったりする経験を子供たちに味合わせたいと願っていた。

【学習後の子供たちの振り返りから】

・食べ物を食べることが実は当たり前のことではないということがわかりました。

・今までけっこう給食を残していました。これからも残してしまうかもしれませんが,感謝はしたいです。

・世界では,こんなにたくさんの食べ物が捨てられているんだとおどろきました。

・家でも１年間でどれくらいの食べ物を捨てているのか調べてみたくなりました。消費期限に気をつけて食べ物を買ったり食べたりしたいです。

・日本でも食べ物を寄付することができるのを初めて知りました。誰かの役に立つこととか困っている人を助けることにつながってうれしかったです。

実践を通して一番の成果だと感じることは，子どもたちの活動が学校を飛び出し，社会とつながったことである。教室で学んだことが社会の役に立ち，自己有用感が高まるとともに，「学校の勉強は社会に通用する」ということを子供たちが実感できたことは非常に大きなことだと考える。今後も，学校での学習は，社会とつながっているということを子供たちに意識させながら日々の教育活動にあたっていきたい。

また，学習後の子供たちの給食の様子を見ると，食べ物に対する意識に変化が見られた。以前のようにあからさまに食べ物を粗末に扱うことは減った。残食が減ることはほぼなかったが，片付けのマナーやルール遵守の気持ちは高まった。「感謝はしつつ残す」という姿が多く見られるようになった。

課題であると感じたことは２点ある。１点目は，情報の活用の仕方である。インターネットや書籍から得た情報を活用する際，難しい言葉を意味も分からずそのまま丸写ししようとしたり，引用する際に出典を明記しなかったりすることがあった。今後，情報化社会を生き抜いていかなければならない子供たちにとって，情報活用能力や情報モラルはとても大切なものとなる。今後も折に触れ指導する必要性を感じた。

２つ目の課題は，「まとめ・表現」の部分が不十分であったところである。小学校学習指導要領解説「総合的な学習の時間編」には，まとめ・表現の際に配慮すべきこととして「相手意識や目的意識を明確にしてまとめたり，表現したりすること」と述べられている。今回まとめの際，子供たちに対して，誰に対して何のためにまとめるのかを明確に示さずに進めさせてしまった。相手意識や目的意識を明確にさせ，しっかりと最後のまとめに取り組ませれば，さらに質の高いまとめになったと考える。

今後も総合的な学習の時間だけにとどまらず，他教科でも相手意識と目的意識を大切にする声掛けは続けていきたいと考えた。

本実践では，米作りを通して，食品ロスやフードバンクなど，福祉の面からアプローチをした。しかし，米作りは流通・経済の面や自然環境の面でも深い学びにつながる可能性を感じた。今後も学校行事や毎年恒例となっている取り組みに対して，「どんな学びが生まれそうか？」という深い思慮と高いアンテナをしっかりと持ち続けていきたいと考えた。